碩心

社団法人　日本詩吟学院岳風会　認可
神奈川　碩心会　発行

58年6月号（131号）
発行者
根岸岳萃
編集
中村愛岳

58年6月現在会員数

逗子地区	147名
葉山地区	297名
大船地区	63名
（合計）	（507名）

吟詠芸術向上と大衆化への道拓く

木村岳風（2）

長野県本部長　竹ノ内　岳宗

〝全国朗吟普及の旅〟

この転身を考え、直接木村先生に勧めたのは、諏訪出身の東京府立第五中学校校長伊藤長七先生で、朗吟も名手であった。木村先生は、伊藤先生の勧告によって朗吟教授の意を固め、東京芝の寓居を中心に、東京市内を土台に朗吟普及の旅に出て行った。後押しは、伊藤長七先生、中野正剛先生、増田一悦氏（日本新聞主幹）、堀内文次郎将軍、日東レコード社友伊藤松雄氏（諏訪出身）などで、片倉製糸株式会社重役片倉武雄氏は、朗吟会場や旅先の宿舎について世話された。昭和二年のことである。先生、ときに二十九歳。学校・工場・会社・軍隊ー多数の場所に目標をつけ、校長さんや工場長さんに、伊藤先生からもらった紹介状を見せ一吟を申し込むのだが、なかには、無下にその希望を断わるものもあり、空しく帰ることも多かった。

しかし木村先生は、そんなことに落胆することなく、再三、その学校、工場を訪ねて初期の目標を果した。まったく不屈不撓ー文字通り確固たる対応ぶりであった。

昭和二年から同十九年まで十七年間、先生は全国各地を行脚した。満州事変が始まり、また、戦争が段々広範囲に広がっていってからは、行脚は朝鮮・中国に及んで寧日がなかった。そして健康が損なわれていった。

外地で野宿同様の生活をしたことも多かった。無理をしないようにとの夫人や門弟の訴えを聞き入れず、南船北馬の旅は長く続いた。

昭和十九年、中国から帰京した際は、ゲッソリと痩せて、側近の夫人・門弟がとても心配したが、先生の胸中には大陸で苦労を続けている将兵のことが浮かび、国に殉ずる決意があったと推測される。

少年十六歳、陸軍の将星になるべく幼年学校入学の志をたて、厳父の承諾が得られず、空しく初志の貫徹が出来なかった先生にとって、戦線の最前方まで出吟された気持ちは、かねて覚悟のことであったと思う。

（以下次号につゞく）

◇筆者竹ノ内岳宗先生は木村岳風先生の竹馬の友であり、この原稿は松井岳洋先生を通じて連載させていただきます。

詩吟雑感

大船A支部　立澤　御風

人間が築いてきた科学文明の進歩は、めまぐるしく、その恩恵を受け生活し、客観的な知識は、驚くほど進んでおりますが、文明は人の心に宿る感性をも喪失しつゝある様に思われます。私自身、疎かになっている面にふと気付き反省することがあります。

私が吟の道に入った動機は、ある結婚披露宴の席で、木村岳風先生の結婚祝の詩を拝聴し、祝事にふさわしい、わかりやすい詩に感銘したからです。その後何度か縁があり、色紙に書いて若いカップルに手渡し吟じさせていただきました。一昨年、新潟のたかねで吟じた時は、大変喜ばれ、愛吟者が出来た思いで帰京しました。

人生のはじまりは、何度かある様に思います。そのはじまりをのがさず、うけとめられるか否かで、充実した一コマともなり、又、空虚さともなると思います。私にとって吟道は、その貴重なはじまりです。

子育てから手が離れ、充実した人生を送りたいと仕事を持ち、家庭と両立させ乍ら耐辛苦のうち、十年の歳月がながれましたが、その間、学ばねばならぬことが山積され、一生かゝってもその何十分の一もはたせない非力さに、わびしさを感じております。無芸で詩を愛すると云えるほど、文学的なセンスも持ち合せていないが、下腹より力一杯、詩を吟じたときの喜び、ストレス解消、健康のありがたさを味わっている今日です。そして、かめの様に一歩一歩前進してゆきたい心境です。

◇

理事会ひらかる

とき・58・5・14(土)
ところ・桜山下会館

（議事）

一、昭和五十七年度決算報告
二、〃　会計監査報告
三、昭和五十八年度予算案審議

右の件承認されました。

（連絡及び報告事項）

一、総本部大会の入場券の件
◇7・17(日)選抜者吟道大会(読売ホール)
◇11・20(日)一集～九集までのレコード吹込者の発表大会（明治神宮記念館）

右会は申込〆切ずみ

◇8・6(土)7(日)夏期吟道大学

右希望者は五千円を添え千葉剱岳迄

二、各地区長、部長会務状況報告

第八回吟道温習会終る

六月五日(日)、図書館ホールに於て盛会に終りました。五月現在会員数五〇九名と増加の一途を辿る碩心会らしく、新人の顔ぶれが多く、新鮮な気分の温習会でした。

先輩も新人も一つにとけ合って吟道に打ちこむ姿は実に美しく、又当日の会の運営も一体となって各役割を果され、成功の裡に終る事ができました。

又期待のコンクールで、私なりに感じられた事はどのチームも態度よし、音程よしでよく揃い、採点は迫力の点のみでわずかの差がついたように思えました。入賞は次の通りです。

一位、風早支部　二位、堀内支部F班
三位、真澄支部　四位、桜山A支部
五位、逗子A支部

◇

俳句

堀内支部A　石渡　桂風

雲の峰　漕ぎゆく船の声湧かせ
ふつと来て　山の揚羽に檜の香

〃　佐久間　爽風

短夜の　島へ近づく櫓の音す
玖槐(はまなす)の　紅ふかみゆく　海の霧

碩心会吟行会

木曽路めぐり（第二日目）

大船A支部　岩崎　恵岳

漸く春めいた恵那峡を八時十分出発、木曽路へと向う。涸々と流れる木曽川を左に見て妻籠宿に到着、先ず脇本陣を見学、総檜造りの家の立派さに驚く。大きな囲炉裏に赤々と太薪が燃え、此処のガイドさんの流れる様な名調子に聞き惚れ乍ら、それぞれの部屋を見学、外に出れば妻籠は今が梅の盛りで純日本的な静かなたたずまいの中旅行者の姿だけが目に写った。街道ぞいに軒を並べる格子戸作りの民芸店も数える程しかなく、その昔皇女和の宮様の行列が三万ものお供をしたがえて通ったというこの街道も中央線が敷けた為すっかりさびれ、今ではそのお蔭で国の文化財として昔のままの姿を止めている。

次の馬籠でバスを降り島崎藤村記念館に入る。写真でみる藤村は仲々のハンサムで小説「夜明け前」の原稿やら、自筆の書物が数多展示されていて、特に「千曲川旅情」の軸の前では一字一句確める様に読み、一同来た甲斐ありと至極満足気であった。

主な見処を終り、バスは昼食の場所へと進み休憩の後唯帰路をひた走り浜名湖へ着く。こゝの桜は五分咲きで真正面には何とも見事な夕富士の姿があり、皆無心で見入った。富士川を過ぎるあたりより少しづつ渋滞が始まり、予定より少し遅れて九時半逗子駅前に到着、全員無事又の機会を約して散会した。

二日間にわたり色々お世話いたゞいた諸先生方に心より御礼申しあげます。

吟行俳句

恵岳

木曽谷の　芽吹励ます水の音
妻籠なる　春の香高き笹だんご
木曽路行く　流れ豊かに初燕

(註)「千曲川旅情の歌」のこの命なにを齷齪（あくそく）は「あくせく」とカナがふってありました。

短歌

風早支部　長島　玉風

蒼き空　うつしてあおき海原の
　漣を押し風渡りけり
紅梅の　ちさき蕾のほころびて
　濡れたる枝に小鳥飛び交う
朧夜に　匂い漂う沈丁花
　頬よせおればいのち若やぐ

教場だより

銀詠支部　清田　嬉風

夏を思わせる暑さの四月二十七日夜に銀詠支部十周年の集いの会をもちました。会場のホテル養神亭には、千葉剱岳、香岳先生並びに、元会員の三名の方も御出席下さいました。当支部橋本支部長以下、病気欠席の方以外ほとんど出席という楽しい会となりました。橋本支部長の挨拶に始まり、剱岳先生よりお祝辞を賜り、香岳先生の乾杯の音頭で十年間精進したところの会員による独吟に入りました。

終って宴たけなわとなり、当節流行のカラオケなど出ました頃はそれぞれがパートナーと組んでダンスとなりました。気がついた時目前の一組にびっくり、思わず女性三人が異句同音に「早く写真を写して！」と叫んでおりました。なんと千葉先生御夫妻で踊っていらしたのです。私達が十年間お世話になっておりまして、その間ずっといつもお揃いでしたがついぞ一度も二人御一緒のダンスはおみかけしませんでした。香岳先生はいつもダンスを踊られますが、剱岳先生は「僕は駄目」とおっしゃって、ついぞダンスはお目にかゝれませんでしたので皆びっくり……とたんに「先生私と踊

って下さい」と女生徒？が殺到、大変もてもてとなり、男生徒？は目を丸くして羨ましそうに眺めておりました。

四十八年の二月頃、両先生の御指導を仰ぎまして、山号を戴くまで全員揃っての昇段でしたので最初のうちは半年に一回の昇段の度にお祝いの会をいたしておりましたし、五十年に旅行会を始めまして毎年一月末か二月初めに親睦吟行旅行をしてきましたが五十七年私の病気入院などで中断し、本年は銀詠支部の十周年になりますので、記念にということでさゝやかながら十周年の会を持つことになったのです。

最後に剱岳先生より「吟を習う者としての心掛けと、人と人とのふれあい、人の和という大事なことをいつも念頭において行動する様に」との有意義なお言葉を賜りまして閉会となりました。この十年間、いつも暖かい目で私達銀詠の遊子達を御指導下さいました両先生に厚く御礼申しあげますと共に今後共宜しく御指導下さいます様お願い申しあげます。

最後に教場の紹介をさせて頂きます。

A教場(剱岳先生)逗子銀座会事務所会議室 (金) 八時より

B教場(香岳先生)銀座通りタカヤマ金物店横入(きらく)守永宅、(木)一時より

句々涙あり

太宰府の詩(吟剱詩舞より)

世に「学問の神」として崇められる菅原道真が、藤原一族の讒言にあい、都の右大臣の職にありながら、にわかに九州の太宰権帥として左遷されたのは、醍醐天皇の延喜元年(九〇一)正月二十五日、道真五十七歳のときである。太宰府での生活は道真自身が

家を離れて三四月
涙を落す百千行
萬事皆夢の如し
時時彼蒼を仰ぐ

と詠じているように、荒涼寂莫としたものであり、思い出すのは皆、都のことばかりであった。吟詠家に親しまれている「九月十日」の詩も、左遷された年の九月十日の夜、配所の菊の花を見て、ちょうど一年前、右大臣当時、宮中の清涼殿に召され、「秋思の詩」を賦し、帝からおほめの言葉と御衣をいただいた折のことを回想し、詠じたものであった。

去年の今夜清涼に侍し
秋思の詩篇独り断腸
恩賜の御衣今此に在り
捧持して毎日余香を拝す

(支部長交替)

堀内支部長白井寿風任期満了に付、新支部長に沼田真風

(入　会)

587 飯島カツ　葉山町堀内一七七二
(堀内A)(電)〇四六八―七五―三五四六
589 金澤一郎　葉山町堀内一六八四
(堀内A)(電)〇四六八―七五―〇六七八

(退　会)

82 大川翠風(大船B)　325 三壁猛泉(銀詠)
449 森　キミ(一色A)　471 河戸道子(一色A)

歩きてスイスイ

土・日曜はこの辺りは大変な交通渋滞…5月14日(土)七時からの理事会も、葉山方面からはひと苦労で、目的地迄歩いた方が早かろうと幸岳は山手廻り、私は海岸廻りを選びヨーイ・ドン／途中バスをも二台追い抜き、渋滞の車を尻目に、車中の人はさぞかし羨やましく見ているだろうなーなんて思いつゝ、胸張って大股で濶歩…今はやっているめだかの兄弟ではないけれどスイスイ・スイスイ…それにしても土・日の会合は考えものですね。